

<銀の匙>の国語 授業

映画文学人生論

橋本武 (1912-)2013

『<銀の匙>の国語授業』(2012) 「岩波書店」
『灘高・伝説の国語授業：本物の思考力が身につくスローリーディング』(2011) 「宝島社」
『灘高教師が教える一生役立つ学ぶ力』(2012)
「日本実業出版社」

すぐ役立つことは、すぐ役立たなくなる。
もつと横道にそれてみよう…。

橋本武『「銀の匙」の国語授業』は、中勘助の小説『銀の匙』を教材とした国語授業の経験談。その授業で生徒たちは、中学三年間をかけて、横道に入り込みながら、ゆっくり読む。

そんな悠長な勉強法で大丈夫だろうかと心配になるが、灘中学の生徒たちは着実に実力をつけ。六年後に灘高校を卒業すると、続々と東大はじめ名門校に進学したという。スローリーディングというこの読書法は試みる価値がありそうだ。

横道というのは、たとえば、作品内で凧揚げのシーンがあれば外で凧揚げをし、駄菓子が登場すれば教室で実際に食べてみる。主人公が百人一首を覚えさせられると、生徒にも覚えるようにすすめ、生徒は実際にかかるたを取って、遊ぶ。遊びながら百人一首にしたしんでいくというやり方だ。

授業では毎回、ガリ版でプリントを準備して、自分が調べた過程を生徒にも経験してもらおうようにした。大事なものは答えではなく、過程だ。早急に答えを求めてはいけない。すぐ役立つことは、すぐ役立たなくなるという。

なるほど。私はけっして速読をしているつもりではなかったが、意味が分からない箇所はとばし読みをするクセがあり、そのため、なにがなんだかわからなくなることがある。

橋本武は分からない箇所は徹底的に調べ、どう



映画文学人生論

<銀の匙>の国語授業

しても分からないときは、作者の中勘助に問い合わせ、中勘助はその都度、丁寧に答えた。

『銀の匙』を教材に選んだのは、夏目漱石が美しい日本語だと激賞したことも理由の一つだが、結局は橋本武の好みである。スローリーディングを採用する前に多読、乱読をして、いろんな本を読んでいるうちに、運命の一冊である『銀の匙』に巡り会ったというわけだ。

彼の読書歴は私の経験と重なっているところもある。小学校三年生のときの授業で真田幸村、猿飛佐助、霧隠才蔵などが登場する講談本を読んでもくれる先生がいて、国語の時間が好きになったというが、私も小学校三年生のころ、家にあった立川文庫を読んで、読書好きになった。

スローリーディングとともに多読も大事だとして、桑原武夫『文学入門』の「世界近代小説五十選」をすすめたところ、五十篇すべて原書で読んだ教え子があらわれた。彼がいうには、丸善に注文して原書を取り寄せたけれど、一冊だけ絶版になっていった。それ以外はぜんぶ読んだという。

「世界近代小説五十選」は私も翻訳を速読で読もうとしたことがあるが、あまり身につかなかつた。スローリーディングでもう一度、挑戦してみたいとも思う。橋本武先生のように一〇〇歳まで生きてらせんぶ読破できるだろうか。

懐かしき教壇に立ちはずも

「銀」の授業のできる幸せ

橋本武